

高等学校における教養としての第二外国語教育

生成AI等最先端の教育DXに関する一報告

滝口秀人

(自由ヶ丘学園高等学校／立教大学特別講師)

1. 第二外国語の授業を取り巻く現状

近年、AI に代表される新しい「ツール」が出現する中で、第二外国語教育界でも、多くの教員が様々な試行錯誤をしている。一方で学習者たちは、とりわけモチベーションのある層は、SNS や動画サイト、ネットを活用した様々なツールなどを用いて、場合によっては言語教育者を必要としないまま、外国語話者と直接コミュニケーションをとることが可能な時代になっている。日本で前提とされてきた教師と生徒の伝統的な関係性や学校の「教室」という「特別空間」は、第二外国語教育の世界でも、変わってきている。

このような時代にあって、第二外国語教育者は、どんな授業を構築できるのだろうか。「授業」の前提条件を、これらの「ツール」を受け入れる／受け入れないという単純な 論理で括ることはできないと考える。個人同士が、お互いが学習言語の文化的背景の知識のないまま、多文化／異文化を前提に話し合う世界が今ここにある現代において、第二外国語の授業で、何を行うことが学習者の将来に役立つのだろうか。傾聴すべき多くの試行錯誤と情報共有がなされているが、より深部を探り将来を想像したい。

2. 勤務校の授業と現状の問題

発表者の勤務校では、記録によると、戦前からドイツ語などを開講していた。英語以外の第二外国語教育の流れは一旦途絶えた後、2019 年からフランス語と中国語、2023 年からはドイツ語も加えた三カ国語を学校設定科目として開講している。特徴的なのは、週 1 コマ年間 1 単位で 2 年間、当該言語を母語にしている国々の文化的、社会的な事柄なども含めて 学び、英語圏からの視点に限らず世界を複眼的に見るスキルを教授するという理念のもと授業が展開されている点である。

開講後 6 年を経た問題点は、①例えば動詞変化を暗記させテストをするなどといった、知識の体得に向けての負荷を与えない結果、生徒は教わったことを次週には忘れてしまいがち。②モチベーションの維持が難しい。とりわけ 2 年目の学習者のモチベーション。③社会環境の変化。ここ数年間で、翻訳ツールや通訳ツールなど、外国語の知識がなくても、日常的なコミュニケーションがとれる時代になってきており、「外国語を学ぶ」ことの意味やあり方が問われるようになってきている、等々

上記の状況の中、受験を考えなくてよい「教養」主義の授業だからこそできる実験的な試みをいくつか紹介する。そのうえで、現在の環境を踏まえた未来の「第二外国語授業」を共に考えたい。

3. 未来の教養としての第二外国語授業(体験と小さなワーク)

多くの「ツール」をすでにご存じだと思うが、まずは学習者たちが現在いる世界を体感していただきたい。Google 翻訳、ChatGPT、Galaxy 翻訳アプリなど。これらのツール使用を「禁止」することを「禁止」したときに、教員の意味・立場・仕事はどうなるのだろうか。

「教養」の感覚が、足掛かりの一つになるのではないかと、現時点では考える。現状の様々な矛盾や苦しみの中、多くの教員がおそらくは感じていることを言語化し、解決は見えなくても問題点を共有することで、将来の授業構築への出発点とすることができれば幸いである。

授業での実践例

○語学だけではない文化的な体験の共有、価値観の共有による気付き・共感・言語障壁の撤去

例：・Google Earth のスライド機能を使ったフランスの街案内

・K-POP のフランスでの状況共有

等々

○言語翻訳／通訳の限界点に挑戦する

例：Google 翻訳の限界はどこか！？

ChatGPT の間違い探し

GalaxyAI で通訳をお願いしてみよう！

→できなかったことは何だろう。なぜできなかったのかを考える。

○受験勉強にも役立つ第二外国語の授業(AI がまだ追いつけない分野を見つける)

例：・受験に使う英語と結び付けて、言語学的視点から学問的興味を刺激する

例：英仏文法比較(AI 使用可で、AI を超えた授業を試みる)